

昨年末に1トロイオンス=4,000米ドル台前半で推移していた金(ロンドン金現物)価格は、今年1月下旬に史上初めて5,000米ドルを突破しました。しかし、その後反落し、足元では4,000米ドル台半ばで推移しています。年初来で乱高下となる中、本稿では、世銀(世界銀行)が4月下旬に公表した最新の商品価格見通しに基づき、金相場の動向や展望についてご紹介します。

足元は投機的資金の影響で価格変動性が高まる

今年に入ってからの金相場について世銀は、地政学リスクの高まりに伴う投機的資金の流入や、リスク回避先としての需要の増加が、月間ベースで最高値をつけた2月頃にかけて、価格押し上げに寄与したとしました。しかし、イラン紛争を受けたインフレ懸念の台頭により、先行きの米金利の上振れが意識され、米ドル高が進行すると、急ピッチで積みあがっていた投機的ポジションが巻き戻されたとの見解を示しました。

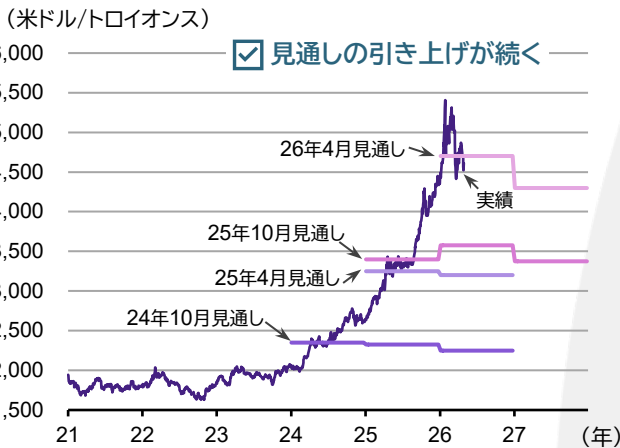
こうした背景から世銀は、金の価格変動性が異例の高水準に達し(図【A】)、調整につながったとしています。ただし、金価格の水準については、調整を経た後も昨年1-3月期を大きく上回っているとも言及しています。

堅調な需要を反映し、見通しは一段の上方修正に

金価格の見通しについて、世銀は、26年に年平均4,700米ドル、27年には4,300米ドルと予測しました(図【B】)。前回(25年10月)見通しにおける、26年:3,575米ドル、27年:3,375米ドルから、いずれも大幅に上方修正した格好です。

【B】金価格の推移と世銀による見通し*2

(2021年1月4日～2026年4月30日、日次)



*2実績は日次の値、見通しは年平均値で2027年まで

世界銀行やワールドゴールドカウンシルなどの信頼できると判断した情報をもとにアモーヴァ・アセットマネジメントが作成
※各指数の著作権等の知的財産権その他一切の権利は、各指数の算出元または公表元に帰属します。

●上記は過去のものおよび見通しであり、将来の運用成果等を約束するものではありません。

2025年9月1日付で、日興アセットマネジメント株式会社から社名変更しました。

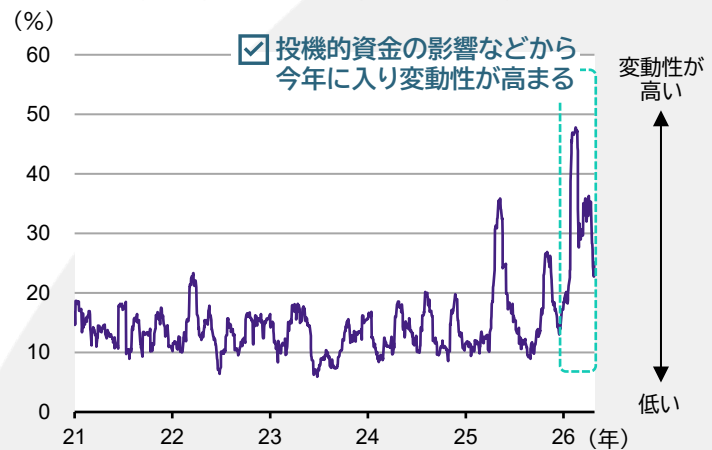
当資料は、アモーヴァ・アセットマネジメントが情報提供を目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解および図表等は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。

こうした見通しについて世銀は、25年半ば以降回復した金ETF(上場投資信託)などの民間部門や、中央銀行など公的部門の需要が(図【C】)、引き続き堅調に推移し、金相場の支えになるとしています。

なお、金を含む貴金属の価格見通しについて世銀は、インフレ圧力の高まりに伴う主要国での想定外の金融引き締めや、地政学的緊張の後退などを、下振れ要因として挙げています。しかし、先行きの不確実性は大きいものの、通商政策や中東情勢を巡る投資家の懸念などを背景にリスク回避先としての需要が強まる可能性があり、下振れよりも上振れするリスクが高いと指摘しています。こうしたことから、過去数回がそうであったように、再び見通しが上方修正される余地もありそうです。

【A】金価格の変動性の推移*1

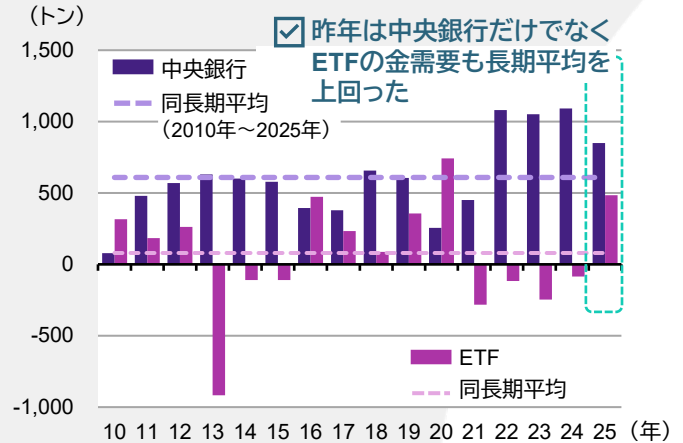
(2021年1月4日～2026年4月30日、日次)



*1価格リターンの20日間標準偏差を年率換算

【C】中央銀行とETFの金購入量*3

(2010年～2025年、年次)



*3純購入量(購入量から売却量を引いた値)